



● 筑波技術大学大学院設置記念式典を挙行

平成 22 年 6 月 2 日 水曜日、オークラフロンティアホテルつくばアネックスにおいて、筑波技術大学大学院技術科学研究科の設置を記念し、式典及び祝賀会が行われました。



式辞を述べる 村上 芳則 学長

当日は、文部科学省の小松親次郎大臣官房審議官、財団法人聴覚障害者教育福祉協会会長の山東昭子参議院議員、市原健一つくば市長や県関係者、障害者団体関係者、大学院第一期生、大学関係者など約 110 名が出席しました。

式典では、渡部産業技術学専攻長の司会のもと、村上学長が「本学の大学院修了生が技術者、研究者、そして医療人などの高度専門職業人として、さらには、本学の教員として活躍し、より良い社会自立を実現し、そしてリーダーとして社会へ参画、貢献できることを示していかなければならない。学生の力を伸ばすために全力を尽し、学生と協力して世界で初めての大学院のより良い歴史を積み重ねて行く」などと式辞を述べた後、小野東副学長から大学院の構成、産業技術学及び保健科学両専攻の目標、教育課程等についての概要説明がありました。

引き続き、文部科学省の小松大臣官房審議官、財団法人聴覚障害者教育福祉協会の山東会長、山口茨城県保健福祉部長及び市原つくば市長から祝辞があり「この度の大学院の設置を契機として、これまでの輝かしい実績を踏まえつつ、聴覚・視覚障害者に対する人材育成と学術研究の、我が国における、さらには国際的な中核的拠点としての地位を固めていかれることを期待する」などと期待を込めた言葉がありました。

記念式典終了後、同ホテル本館ジュビターに会場を移し祝賀会が行われ、大越保健科学専攻長の司会のもと、村上



祝辞を述べる小松大臣官房審議官

学長のあいさつがあった後、藤田幸久参議院議員代理の村上氏から「我が国唯一の聴覚・視覚障害者のための大学である筑波技術大学に新たに大学院が開設されたことは大変うれしく思う。第一期生やそれに続く皆さんが社会に参画する人材として活躍されるよう祈念する」などと祝辞がありました。



乾杯の発声を行う 高橋 孝助 宮城教育大学長

引き続き、宮城教育大学の高橋孝助学長の発声により乾杯が行われ、懇談の途中には筑波大学の清水理事・副学長及び元筑波技術短期大学長で財団法人筑波技術大学教育助成財団の小畑会長からのスピーチもあり、和やかな雰囲気の中大学院設置を祝いました。

総務課 前原 和雄

● 国際交流：視覚・聴覚障害学生の合同による米国研修

国際交流活動の一環として、平成 22（2010）年 3 月 17 日水曜日より 25 日木曜日までの日程で、国際交流協定締結機関二校の訪問を主とした 6 名による米国研修を実施しました。

● 参加者

教員 2 名：ポーリー・マーチン教授、大杉 豊准教授

視覚障害学生 2 名：川村 玲（鍼灸 3 年次）、
富田 勇貴（鍼灸 3 年次）。

聴覚障害学生 1 名：岡田 智裕（産業情報 3 年次）

日本語－手話通訳者 1 名

● 活動報告

交流協定締結機関二校の訪問が本研修の目的の一つでした。ニューヨーク州立大学バッファロー校では英語教育センター（ELI）を表敬訪問し、視覚障害学生は英語授業見学、聴覚障害学生はアメリカ手話授業見学とそれぞれ米国で使われている言語の語学授業に挑戦しました。もう一つの交流協定締結機関であるロチェスター工科大学（RIT）では、国立聾工科大学学長を表敬訪問し、キャンパス全体を見学しました。また、聴覚障害学生は RIT に学ぶ聴覚障害学生の自宅（デフファミリー）を訪問し、学生及び家族との交流を深めることが出来ました。

ほかに、セントメリーろう学校、西ニューヨーク自立生活センター、イーストマンハウス、ロチェスター大学アメリカ手話学科と、バッファロー及びロチェスターの市内にある視覚・聴覚障害関連の福祉・教育機関を訪問し、担当者よりていねいな説明を受けてそれぞれの果たす役割や内容について多くを学ぶことが出来ました。

本研修のもう一つの目的は、視覚障害学生と聴覚障害学生が一緒に行動する中でお互いに異なる障害への理解を深めることにありました。学生同士のコミュニケーションは①小さいホワイトボードに大きな字を書いて筆談する方法、②手話通訳を通して会話する方法、③手のひらに文字を書く方法が見られましたが、研修全体を通して見ると②の方法が多く取られていました。コミュニケーションのみならず、移動するときの介助、視覚情報や音声情報の確保など、お互いに協力し合って補うことが出来ることに学生自身が気づく機会となったのではないのでしょうか。

● 学生の感想

川村 玲「…筆談や手話通訳を通すなどして、色々話がしたいと考えた。聴覚障害者から見たこの世の中のことや、どういう人生なのかということに興味があったので、この研修の中で是非対談したいと思っていた。対談の中で私が強く刺激されたことは、大杉先生が 10 年間もロチェスターで生活していた話である。先生のチャレンジ精神と積極的な行動力は、大変私の胸に響き、また私の考えの幅が広がったようである。…」



手話通訳を介してコミュニケーションを取る学生

富田 勇貴「…視覚障害者といっても日本と米国での社会的な位置が違うもので自立という言葉の解釈にも相違がみられてそういったところが一番勉強になった。今回の研修では聴覚障害を持つ学生と一緒にだったが盲と聾とのコミュニケーションがうまくいかなかったように感じた。ホワイトボードを使って読み書きができる学生はそれでよいのかもしれないがやはり盲と聾との間の会話というのは難しいものがあつた。今後、そういった場合の対処について個人で方法を探っていきたい。」

岡田 智裕「…今回の研修旅行を通して、“盲者”という言葉は差別用語であること、視覚を失った事で聴覚がより鋭くなるということには必ずしも結びつかないこと等、視覚障害者についていろいろ知る良い経験になりました。…その他、アメリカ手話については前もって少し勉強しましたが、思うようにコミュニケーションが取れなく、結局大杉先生に頼ってしまう場面が多かったです。これを機にアメリカ手話を本格的に勉強しようという気持ちが湧いてきました。…」

● おわりに

ナイアガラ滝に至る橋の上で視覚障害者は車の激しく行き来する車道側を怖がり、聴覚障害者は足元がすくむ高さを感じる欄干側に怖気づくといった感覚の違いにみんなで大笑いする一方、聴覚障害者が体調を崩して診察を受けた病院では到着後 10 分以内に手話通訳者が駆けつけてくるなど米国の福祉レベルの高さを実感するなど、視覚障害学生と聴覚障害学生が合同で行う研修として新しい発見のある実り多きものになりました。国際交流活動のみならず、学内でも視覚・聴覚障害学生による相互理解を目的とする交流授業が推進されるべきでしょう。

本研修の実施にあたってご協力をいただきました学内外の関係者の皆さんに感謝申し上げます。

障害者高等教育研究支援センター 准教授 大杉 豊

● 「聴覚障害学生支援親の会」 大学参観及び懇親会

平成 22 年 7 月 9 日金曜日に「聴覚障害学生支援親の会」(以下「親の会」という。)が、天久保キャンパスで開催され 38 名の保護者が参加されました。「親の会」は、聴覚障害児を育ててきた保護者の立場・経験から筑波技術大学の学生の生活環境改善や生活指導等への参画、及び教育環境・手法等へ意見提示、対外的な広報等に協力する等の活動を通し、筑波技術大学の発展に寄与する目的で、平成 20 年 12 月に設立されたもので、今回で 3 回目の開催となります。今年度の「親の会」では、始めに授業参観を行い、引き続き教職員と保護者の懇談会を実施しました。最後に、希望する保護者(15 組 16 人)とクラス担任等による個別面談を行い、盛会のうちに終了しました。

● 「親の会」丸谷代表及び村上学長挨拶

授業参観終了後の教職員と保護者との懇談会の冒頭で、「親の会」丸谷俊博代表による挨拶、今年度の世話役(佐原郁代氏、中島康志氏、高橋章子氏(当日欠席))の紹介・挨拶がありました。

引き続き、村上学長から、新学生寄宿舎の落成、大学院の設置、教職課程の認定申請等について報告や、大学の教育方針等の説明がありました。

● 大学側からの説明事項

始めに、渡部産業技術学部長から、産業技術学部の就職に向けた教育・支援体制と卒業後の進路に関しての具体的且つ詳細な説明と、平成 22 年 3 月卒の第一期生の進路状況及び就職先、現 4 年次生の就職内々定状況についての報告がありました。その後、教職課程認定申請の概要について説明があり、最後に懇談会に参加している学科長等の紹介・挨拶がありました。

続いて、事務局から教職課程認定について、平成 23 年 4 月開設に向けた文科省への申請の進捗状況や開設後の履修体制について補足説明があり、支援課参加職員の紹介・挨拶がありました。また、事務局から、出欠回答時の回答アンケートへの質問・要望事項に対して、大学側の回答を示

しました。

● 懇談会

懇談会においては、保護者から質問のあった就職に関し、大学側から、インターンシップや就職先の決め方は、各学科および専門によって多少異なるが、原則として本人および保護者の納得を得て決めていること、地元企業への就職支援では短大(事業所(現場)採用)と 4 大(総合職としての採用)の違いが生じていること、また、企業就職者への現状は一期生を追跡中であるが、ミスマッチがあればフォローする体制を取っている等回答がありました。

続いて、保護者から手話口話等の得手、不得手によるクラス分けをしてはとの意見が出されたが、学力による同一科目の複数クラス分け方式を過去 5 年間実施しており、学生からも評価されていること、さらに、1 年次に手話等のコミュニケーション方法についてのアンケートを行い、その結果を教育指導等に活用していること、また、2 年次からは小人数制の専門教育となり、実質的には個別対応していること等の回答がありました。

● 「モバイル型遠隔情報保証システム」等紹介

続いて、携帯電話を活用した「モバイル型遠隔情報保証システム」について、障害者高等教育研究支援センター・三好准教授から、ニュース録画ビデオにより概要の紹介や、「PEPNet-JAPAN(日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク)」について同センター・白澤准教授からその概要と活動成果について紹介がありました。もし、この件に関し相談がある場合は、大学等の担当者を通じて相談願いたい旨の説明がありました。

● 「親の会」丸谷代表謝辞

最後に、丸谷代表から、参加保護者及び大学関係者への謝辞と今後の活動への協力要請があり、閉会となりました。

聴覚障害系支援課 鈴木 清

● タイ王国教育省教育審議会訪問団が来学

7月5日月曜日、タイ王国教育省教育審議会訪問団7名が、障害者教育の理解を深めることを目的に来学しました。

当日は、村上学長から、本学の概要や視覚・聴覚障害者の高等教育の現状などについて説明を受けたのち、学内を視察しました。

春日キャンパスにおいては、点字教材や図面を触って理解するための触図作成、拡大読書器、音声化ソフト等の機器の説明、さらに、情報システム学科の教室に移動し、学生個々の障害の程度や特性に応じた教材やパソコン環境などについての説明を受けました。

引き続き、天久保キャンパスにおいては、マルチメディアを活用した聴覚障害学生の情報保障システム、字幕挿入設備、高等教育における聴覚障害学生に対する支援のネットワーク事業の説明を受けるとともに、授業の見学を行い



タイ王国教育省教育審議会訪問団への説明の様子

ました。

総務課 佐久山 晃康

● 第20回かすみがうらマラソンに参加して

● はじめに

平成22年4月18日日曜日に「かすみがうらマラソン兼国際盲人マラソンかすみがうら大会」が開催されました。今年では第20回記念・土浦市市制施行70周年・かすみがうら市合併5周年を記念した大会として、昨年記録した過去最多の人数を上回る出走者が参加しました。また今大会は日本陸上競技連盟はもとより国際陸上競技連盟（IAAF）及び国際パラリンピック委員会（IPC）から公認大会として認定され、国際盲人マラソンかすみがうら大会は世界選手権の選考レースを兼ねて開催されました。IPC公認のマラソン大会は今までにはなく日本はもとより世界で初めての大会となりました。

そのような国内最大級の大会に、本学鍼灸学専攻3年次からは出走者3名、伴走者1名、マッサージボランティア6名の計11名が参加しました。様々な立場での参加ではありましたが、みな一様に貴重な経験をすることができました。ここに各人の感想を紹介し参加の報告としたいと思います。

● マラソン参加者

私は国際盲人マラソンかすみがうら大会の5km B-2女子の部に出場しました。今回が2回目の出場で、伴走者と一緒に完走しメダルまで頂くことができました。

昨年は練習中に過負荷をかけて膝を故障するトラブルにもみまわれました。しかし、自分が実際に膝を痛めて理学療法士の治療を受け、患者の気持ちを知ることができて今ではいい経験だったと思っています。

今年は、一年間かけて筋力トレーニングをしながら調整してきました。大学に入学し視力が徐々に低下する毎日に落ち込んだり、無気力になる時期もありましたが、マラソ

ンを始めてから心も体もリフレッシュできる良い趣味になりました。

O.R.

私が本大会に出場したのは、昨年に続き2回目です。特に体を鍛えたことも、運動部に所属したこともないので、初めは1km走るのが精一杯でしたが、徐々に距離が伸びていく事が嬉しかったです。

視力低下をはじめ身体機能の低下は日々感じるものの、もう向上するものはないと思っていたため、体力がついていくことが素直に嬉しかったです。

また、大会当日は沢山の人に応援していただき感動しました。そして一番感謝しているのは伴走者の方です。練習では室内のルームランナーなのですが、伴走者のお陰で外の空気を感じながら安心して走ることが出来ました。

H.T.

昨年の記録更新をひとまずの目標に、「とにかく楽しく走ろう」をモットーに参加しました。当日着ていたクラスのみなさんの似顔絵入りTシャツや、沿道の方々の声援はとても大きな推進力となりました。マラソンは自分との戦いで、ある意味では孤独なスポーツですが、大勢で走ることの醍醐味や、周りの方々や自然に支えられていることのありがた味を実感し感動しました。

U.H.

この度のかすみがうらマラソンでは5キロの部に伴走者として参加をいたしました。

この度の「伴走者」という役目は自分のコンディションのあり方ひとつで、走者に多大な影響を与えてしまう事につながり、まわりのランナーとの接触に気をつけて併走していれば良いというものでもありません。伴走者は、常に走者のコンディションにも配慮すると共に、良くも悪く

もペースメーカーの役割も兼ねていると感じた事が大変大きな経験になりました。これらを次回に活かしてゆきたいと思います。 Y.Y.

● マッサージボランティア参加者

私たち3、4年次の有志7名は、土浦鍼灸マッサージ師会会員で、本学の按摩の講師をしておられる村山先生のご指導のもと、走り終えたランナーのボランティアマッサージを行わせていただきました。地元の先生と学生を合わせて54名が施術を担当しました。

マッサージは大盛況で、テントの前は長蛇の列。次から次へとランナーたちが施術コーナーに入ってマッサージを受けました。

筋が強い選手がやはり多く、一人10分という制限時間のなかで、満足できる施術はなかなか難しかったのですが、帰りがけ、「ありがとうございました」「とても気持ちよかったです」と言ってくる選手もいて充実した1日でした。 T.K.

私たちが会場に着いた時には走り終わったランナーの方がすでに並んでいて、マッサージが行われていました。私たちが着替えたらずぐに施術に入ることになり人の多さにびっくりしました。最初の一人目の方を施術するときは、普段学校で行っている環境も施術内容も違うため、とても緊張しました。

また、開業されている皆さんの施術を間近で見ることができ、とてもいい経験になりました。 I.H.

つくばマラソンに続き、マラソンのマッサージのボランティアは2度目の参加でした。知識や技術も少なく、また今回は普段行っているベッドではなく布団という慣れない環境での施術で、初めは戸惑うこともありました。

しかし、時間の経過と共に姿勢は安定し、さまざまな受療者にもある程度は対応できるようになりました。今回は普段の授業では経験できないような貴重な体験を多くできました。 K.A.

私はマラソン大会でのマッサージボランティアに今回初めて参加しました。普段の実習では、肩こりや腰痛などの方にあん摩をしています。今回はマラソンを走り終わったランナーの方にマッサージをするということで、いつもとは勝手が違っていき、1人あたりの施術時間は10分と決められていて、正直に言うとはじめは必死の思いでした。

一緒にマッサージボランティアをしていた、開業されている先生方の手技やランナーの方との接し方を見たり聞いたりしてとても参考になり、普段の実習ではなかなかできない経験をさせていただきました。

学外に出て自分の実力を知る良い機会にもなったと思います。また、ランナーの方に気持ち良かった、楽になったと言っていた時はとても嬉しかったです。 S.R.

僕は今回このボランティアに参加できて本当によかったです。走った後の方を施術するという経験は今までありませんでした。いつものやり方と違いましたが、もむ側としては移動がしやすかったのでスムーズに施術できたように思います。短時間ずつではありましたが1日に17の方を施術できたことは僕にとって有意義な機会でした。 T.T.

マッサージのブースでは、554名の出走者を施術しました。大会終了後は打ち上げにも参加させていただき、暖かい雰囲気の中で現職の方々と交流を持つこともできました。

今回このボランティアに参加したことでマッサージの技術や知識の向上だけでなく、地域における社会参加の素晴らしさも体験することができました。 T.N.

● 最後に

このたびのかすみがうらマラソン大会参加にあたり、多くの先生方や関係者の方々にご指導ご支援をいただき、大変お世話になりました。心より感謝の意を表します。本当にありがとうございました。

保健科学部 保健学科 鍼灸学専攻 野口 栄太郎

筑波技術大学 平成23年度入学試験日程

